

2024 年度「秋の例会」実施報告

広報担当幹事 渡邊敏正

広島大学マスタース広島では、会員間の交流と親睦を深めるために、毎年、例会を開催することにしていましたが、2019 年度の秋の例会で海田町の旧千葉家住宅の見学および西国街道史跡巡りを実施して以来、コロナ禍のために開催が控えられていました。5 年振りとなる第 3 回ミニ懇話会（大杉節会員による話題提供）が 7 月に開催されたのに続き、この度、安芸の小京都として知られる竹原市への日帰り小旅行（「町並み保存地区を観光ガイドの案内で散策」）が実施されました。本稿はその実施報告です。

【日時】 2024 年 11 月 7 日（木）

【スケジュール】

- 10:20 広島バスセンター集合
- 10:40 広島バスセンター発（5番ホーム、芸陽バス「かぐや姫号」）
山陽自動車道経由（乗車時間約 1 時間 20 分）
- 12:00 道の駅「たけはら」到着
道の駅「たけはら」その他で各自昼食
- 13:00 地元観光ガイドの案内で町並み保存地区を散策（1.5km 程度）
～15:00 （観光ガイドは宮内さんという女性）
以後 16:00まで自由行動
- 16:00 道の駅「たけはら」に再集合
- 16:20 道の駅近くのバス停（新港橋）から「かぐや姫号」乗車
- 18:00 広島バスセンター到着、その後解散
（17:45到着予定でしたが広島市内のラッシュ時に重なったため遅延）

【参加人数】 6 名

当日は晴天でしたが、朝の外気温が 15 度を下回っていたようで、皆さん防寒を意識した服装でした。バスの運行状況は、往路、復路ともにほぼ時間通りでしたし、竹原での行動もスムーズに進みましたので、全体としてスケジュール通りに実行できました。町並み保存地区の散策も観光ガイドの宮内さんの軽妙な説明と相まって楽しく非常に興味深いものでした。総務担当幹事の周到な準備の賜物です。

竹原市は、広島と福山のほぼ中間、JR 呉線沿いで瀬戸内海に面しており、呉線の主要駅が西から、呉、広、安芸津、竹原、忠海、三原と続きます。竹原は製塩で有名ですが、これについては、江戸時代初期（1650 年頃）に赤穂から製塩技術を取り入れて地元で製造開始したところ、地の利を得て赤穂を凌ぐほど製塩業が発展し、全国有数の塩供給元としての名を確立させていったとのこと。塩田整備法により 1960 年に塩田廃止となるまでの約 300

年間、製塩業をベースに大きく発展し、酒、醤油、酢などの醸造業も多数起こり、現在も竹原の名産品として名を残しています。

今回のバス発着および散策の始点・終点となった「道の駅たけはら」（以後、道の駅）は、JR 呉線竹原駅からほぼ北東方向に徒歩で約 10 分にあり、例会の目的地である町並み保存地区は、道の駅たけはらの北側方向に広がり、南北 1km 程度、東西 0.5km 程度の区域です（図 1）。



図 1 「道の駅たけはら」と町並み保存地区および本町通りを中心とした散策巡回路
 (竹原市産業振興課観光振興係/竹原観光協会発行「竹原まちあるき MAP」のデジカメ画像に矢印等を追加して作成)

町並み保存地区の散策巡回路は、道の駅から北東方向へ徒歩数分に位置する旧笠井邸を始点とし、そこから本町通りをメインとして南北方向に胡堂でU字に折り返す形の1.5kmほどの道程です(図1, 写真1, 2)。今回は、道の駅たけはらから歩き始めて、そのコースを宮内さんの説明を受けながら約2時間で回り、再び道の駅たけはらに戻りました(写真3, 4)。巡回路に沿って多くの歴史的な建造物が並んでいます。



写真1 本町通り 正面中央に胡堂



写真2 巡回路の折り返し地点にある胡堂

(いずれも圓山幹事提供)



写真3 道の駅たけはら(椿幹事提供)



写真4 出発前のガイドによる説明(椿幹事提供)

散策巡回路の開始点となっている旧笠井邸は「浜旦那」と呼ばれた製塩業者の豪邸の一つで、内部で耐震性も考慮された見事な天井の梁を見ることができます(写真5)。商人の町ですので、保存地区の町並みはほぼすべて町屋とよばれる商家建築です。例外は、後で言及する頼家(春風館)の屋敷のみで、頼春風(歴史学者・思想家である頼山陽の叔父)が広島藩医を務めていたことから武家屋敷風の構えが許されたとのこと。

保存地区内の参観対象となっている家屋には空き家もある一方、現役で使われているものも多数あります。竹原の地は平安時代、京都下鴨神社の荘園として栄えた歴史から「安芸の小京都」と呼ばれているとのことですが、町並み保存地区に生活がある、という現状にも京都

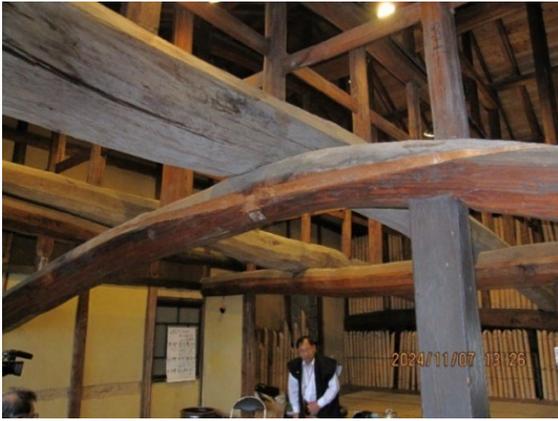


写真5 旧笠井邸の天井の梁



写真6 旧松坂邸の玄関付近

との類似性を感じます。本町通りを少し入ると左手に旧松坂邸があります。松坂家は竹原最大の塩田経営者だったそうで、波打つ形状の大屋根、鶯色の漆喰の壁や菱格子の出窓、など独特の雰囲気を持っています(写真6)。町家の壁が灰色の漆喰を基本としていたなかで、当時の鶯色の漆喰は実に華やかであったと想像できます。竹原の町屋の一つの特徴は、それぞれに工夫された格子を持っていることです。縦格子は木製の棒を縦方向に規則的に並べた構造で、その中に装飾を施した横格子を加える等の凝ったものもあります。家の1階には縦格子を道路側に少し出た形に置いた出格子と呼ばれるものが多く見られます(写真7)。巡回路の往



写真7 出格子にある横格子



写真8 旧上吉井邸(初代郵便局跡)前
にある現役の郵便ポスト

路中程右手に、初代郵便局跡である旧上吉井邸がありますが、その前にあった古ぼけた郵便箱が実は現役の郵便ポストであることには驚かされました(写真8)。

今も続いている酒造りについては、本町通りに入ってすぐの右手に竹鶴酒造があります。NHK連続テレビ小説「マッサン」のモデルにもなった、ニッカウキスキーの創始者竹鶴正孝の生誕の地です。(写真9)。また、胡堂から巡回路の復路に入ってすぐに藤井酒造(酒蔵交流館)が見えます。日本酒の試飲ができ、お酒の好きな方は是非、という場所です(写真10)。



写真9 竹鶴酒造の入り口



写真10 藤井酒造の内部 (椿幹事提供)

加えて、町人たちは豊かな経済基盤のもと学問にも力を入れたようで、竹原はまた「文教の地」としても知られています。頼山陽の父である頼春水とその弟の春風・杏坪(きょうへい)、近い所では物理学者三村剛昂(よしたか)などをはじめとして多くの学者・文人を輩出しています(注)。春水、春風、杏坪はいずれも学問、詩文等にすぐれ、「三頼」と称され、春風は医者で

【注】頼家と旧宅、竹鶴正孝、および三村剛昂に関しては、本報告書にある鈴木盛久幹事の「竹原を訪ねて～61年前にあったこと」も参照してください。特に三村剛昂については、学会活動から反核運動に亙る幅広い活動を俯瞰し、ご自身の経験を交えて綴っておられます。

もありました。政治では第58～60代総理大臣の池田勇人も竹原の出身です。巡回路の往路3分の2程度のところ左手に頼家春風館があります(図1には出ていませんが、旧光本家住宅の東側の位置)。竹原で唯一の武家屋敷風の構えで、巡回路の往路左側に屋敷の東面が、復路左側に西面が見える、という75m四方の広大な敷地です。写真11はその南側にある玄関前で撮影された参加者全員の写真です。胡堂の少し手前右手には、三頼の父、頼山陽の祖父である頼惟清(ただすが)の旧宅があり、当時の清楚な生活の一端を見ることができます(写真12)。惟清は紺屋(染物業)を営みながらこの三人の優秀な子供達を育てたとのこと、裏庭には頼山陽の詩を刻んだ碑があります。巡回路復路で藤井酒造の次に出会うのが旧光本家住宅で、現在は陶芸家今井正之・眞正・裕之親子三人の作品展示館となっているとのことでした。

春風館のほぼ向い、往路右手に洋館建ての竹原市歴史民俗資料館があり、内部に竹原の文化、歴史、民俗、製塩業をはじめとする産業などの資料が収められています(写真13)。「竹原の偉人」のコーナーには池田勇人、竹鶴正孝、三村剛昂の名が見えました。館に隣接した「憧憬の広場」には竹鶴正孝、リタ像があり、撮影スポットとなっています(写真14, 15)。像の横には電飾用配線が付いた竹製のアーケードがあり、「たけはら憧憬の路」のイベントで使われたとのことでした(写真16)。イベントで使用したこの竹細工が、11月15日に広島市で

開幕した「ひろしまドリミネーション」において、平和大通りを色鮮やかな電飾で彩る一端を担っている、という記事を先日中国新聞で見かけました。この地を訪れてみて頼山陽にまつわる竹原と広島の深いつながりを実感しましたが、それとは別に「電飾で街を彩る」という全く予想もしていなかった現代的視点でのつながりに思わず笑いが出ました。



写真11 春風館正門前での全員写真。左から、椿、植村、渡邊、鈴木、圓山、於保の各幹事、およびガイドの宮内さん（圓山幹事提供）



写真12 頼惟清の旧宅（椿幹事提供）



写真13 竹原市歴史民俗資料館

胡堂に向かって本町通りの右手方向にある建物群の背後には山が迫っており、山腹には宗派の異なる3つのお寺、長生寺、西方寺、照蓮寺があります。西方寺の普明閣という観音堂は竹原全体を一望できる人気の観光スポットとなっていますが、寺に続く道はロケ地としても有名なのだそうで、大林宣彦監督の「時をかける少女」でも登場したそうです(写真17)。この映画には胡堂も登場しており、映画の設定は尾道ですが、実際にはどちらもロケ地となりその映像が使われたそうです。



写真14 憧憬の広場



写真15 竹鶴正孝・リタ像



写真16 竹製のアーケード



写真17 西方寺へ続く道(椿幹事提供)

私は、7~8年前にも所用のため道の駅で昼食を済ませて竹原桟橋から高速船を利用したことがあったのですが、実は60~70年近く前にも何度か竹原に来ています。というよりは、通過したことがあります。両親の仕事の関係で小学5年生まで大崎下島、大崎上島で過ごしましたが、客船で竹原港に上陸、JR呉線で広島へ、という経路での往復を何度か経験しています。竹原港に入ると左手が砂浜で、多数の小さな砂の山が延々と桟橋近くまで続いていたように思います。砂の山に何かを掻き集めている様子に見えましたが、母親からこれが塩田というものだと教わった記憶がありました。何年かあとに竹原港に入ったとき、その塩田には大きな

屋根のような骨組みの上から水を落としている様子がいくつも見えていました。それに船は現在よりもっと港の奥まで入っていたように思っていました。1950年代中頃から～1960年代はじめにかけてのことです。これまで特に気にも留めていなかったことでしたが、今回の例会は、道路整備で棧橋が港入り口方向に移設されたこと、1960年の塩田廃止前までには入浜式から流下式へ塩田の様変わりがあったことなど、小学生だった自分にゆっくりと語りかけるようなそのような時間にもなりました。